

加津佐町文化財調査報告書第2集

辻　　貝　　塚　　Ⅱ

1998

長崎県加津佐町教育委員会

加津佐町文化財調査報告書第2集

辻 貝 塚 II

—長崎県南高来郡加津佐町野田名に所在する弥生時代の遺跡—

1998

加津佐町教育委員会

発刊にあたって

このたび、加津佐町文化財調査報告書第2集「辻貝塚」を刊行することができました。

同貝塚は、平成2年にプール建設に伴う緊急発掘調査の経緯があったことから、今回、同敷地内に福祉施設の建設の報告を受け、県文化課に連絡・協議して確認調査を実施しましたところ、本調査の必要があるとの指導をうけましたので、発掘調査を実施致しました。

調査の結果は、礫石器などが出土したことから、平成2年の調査時にも礫石器や管状土器出土していることから、漁撈に携わっていた人の存在がうかがえました。また、形狀のわかる土器片や磨製の石斧の刃の部分なども採集されました。遺構としては柱穴状のものが認められました。今回の調査報告書は前回の報告書第1集「辻貝塚」と併せ読むと興味深いものがあります。

最近、新聞紙上では、全国各地の発掘成果がよく見受けられるようになりました。この報告書が、わが町の古代文化を知る手引書となり、活用されることを願う次第であります。

最後になりましたが、調査の折、種々、ご協力いただきました土地の所有者である野田保育園の宮崎園長さん並びに、梅雨前の気候不順な中に、ご指導賜りました、県教育庁文化課埋蔵文化財班係長、藤田和裕先生、調査員の松崎由紀子先生に衷心より感謝申し上げて発刊のことばと致します。

平成10年6月

加津佐町教育委員会

教育長 松 藤 進

例　言

- 1 本書は平成9年度に実施した、南高来郡加津佐町所在の辻貝塚の調査報告書である。
- 2 調査主体は加津佐町教育委員会で、長崎県教育委員会が調査を担当した。
- 3 調査は平成8年度の範囲確認調査を11月に藤田が、平成9年度の調査を5月に藤田と松崎が行った。
- 4 調査関係者は以下のとおりである。

加津佐町教育委員会	松　藤　　進	教育長
	栗田　富士太郎	教育次長
長崎県文化課	藤　田　和　裕	埋蔵文化財班　係長
調査協力者	松　崎　由紀子	〃　　文化財調査員
	宮　崎　幸　雄	
- 5 調査中の写真は藤田が撮影したが、土器は大平由里子、石器の写真撮影は長崎県文化課文化財調査員中村幸による。
- 6 本書の執筆と編集は藤田による。

本文目次

I 調査に至る経緯	1
II 遺跡の立地と環境	2
1 地理的環境	2
2 歴史的環境	2
III 調査	4
1 調査の概要	4
2 土層	5
3 遺物出土状況	6
4 遺物	6
・土器	6
・石器	11
IV まとめ	13

挿図目次

第1図 辻貝塚の位置と周辺の遺跡	1
第2図 辻貝塚周辺の地形と遺跡	3
第3図 平成2年・平成9年調査区域図	4
第4図 調査区の設定図	4
第5図 土層実測図	5
第6図 遺物実測図（土器・1）	7
第7図 遺物実測図（土器・2）	8
第8図 遺物実測図（土器・3）	9
第9図 遺物実測図（土器・4）	10
第10図 遺物実測図（石器）	12

図 版 目 次

図版1	辻貝塚遠景・近景	17
図版2	調査風景	18
図版3	土層の状況	19
図版4	遺物出土状況	20
図版5	出土遺物（土器）	21
図版6	出土遺物（土器）	22
図版7	出土遺物（土器）	23
図版8	出土遺物（土器）	24
図版9	出土遺物（土器）	25
図版10	出土遺物（土器）	26
図版11	出土遺物（石器）	27

I 調査に至る経緯

平成2年6月、保育園のプール造成と擁壁築造工事に伴い、土器や石器が出土した。工事の作業員が土器を子供に持たせ、学校に届けさせた。学校から町教育委員会へ連絡があり、そこから県文化課に報告された。現地は周知の遺跡で古くから知られており、壺などの断面部で土器や石器とともに貝殻が拾われたこともあったという。また、近所の野田小学校建設の際にもかなりの量の土器が出土したと言われている。昭和58年度の遺跡周知事業の一環として、加津佐町での分布調査を実施し、辻貝塚も周知の遺跡として遺跡地図に登録されている。

周知の遺跡であるため工事を一時中断してもらい、文化課から職員を現地へ向かわせた。田植えの時期で、擁壁の完成を待たねば周辺の水田に水がまわらないという状況で、擁壁部分の発掘調査を実施することになった。発掘調査は6月7日から同9日まで実施され、多数の土器が出土し砾石器や磨石なども含まれていた。遺構としてV字溝や土壙、柱穴などが確認された。プールの建設予定地の調査は6月20日から同25日まで行われた。遺物の出土数は前回にくらべ若干少なかったが壺などの遺構が確認されている。一連の調査の結果、遺跡は弥生時代後期から終末期のものであることがわかり、加津佐町文化財調査報告書第1集『辻貝塚』として1991(平成3)年に刊行されている。

次いで平成8年になって福祉関係の施設建設の構想が持ち上がり、9年度に着工の予定とされた。そのため平成8年11月11日から同15日まで範囲確認調査を実施した。施設が敷地の東側によって造られるとのことで、その部分を集中的に掘り下げた。結果として、調査対象地の南側に深く、遺物を含む層が認められ、北側には少なかった。このため、この部分の本調査の必要性が確認された。遺物の出土状況に不審な点もあり、いずれは本調査の結果明白になるものと思われた。この調査で、大まかな遺物出土状況と、そこまでの深さ、包含層の厚みを知ることができた。



II 遺跡の立地と環境

1 地理的環境

辻貝塚は、島原半島南部の南高来郡加津佐町野田名辻田にある。島原半島はほぼ中心に雲仙岳（普賢岳・国見岳・妙見岳などの総称）が聳える芋形の、東西約17km、南北約31kmの半島で狭隘な愛野地峡部分で肥前半島に繋がっている。長崎県の南東部を占め、行政的には1市1郡、すなわち島原市と南高来郡の16町から構成されている。平成7年の調査によると、島原市58.94km²南高来郡399.96km²合計458.9km²となり、全県土での4090.66km²の約1/9を占める。半島のほぼ中央部に位置する普賢岳は、平成2年から噴火活動を始め、火碎流による人命の被害や、土石流による人家などの財産の被害など、多くの被害をもたらした。半島の北側は比較的緩やかな斜面となって有明海に注ぎ、畑地や水田も割合に豊富な地域となっている。半島の南部は安山岩や玄武岩などの溶岩に覆われた台地になっている。この台地は起伏に富み、小河川が谷を解析している。周辺は東部の有明海、西部の千々石灘に面し南部は天草諸島に向き合っている。東隣の口之津町の瀬詰から約5kmの早崎瀬戸を挟んで、熊本天草郡五和町などが近い。

加津佐町は東側を口之津町、北東を南有馬町、西側を南串山町によって囲まれている。南西部は野田浜や前浜などの美しい砂浜で、夏場は海水浴やキャンプ客で賑わう。野田浜と前浜を区切る場所は岩戸山と呼ばれる標高96mの凝灰角礫岩の岩塊である。山麓の斜面には原始性の高い、常緑広葉樹が茂る。山頂部の岩角地にはクロマツが広く生い茂り、イワシデの群落も認められる。このような状況から、こここの樹叢は国指定の天然記念物となっている。また町西部の津波見海岸からは、象や南方系のシカ化石で特徴づけられる津波見脊椎動物化石群などが出土する。

辻貝塚は、小松川と堀川に挟まれた南西方向に向いて伸びる丘陵上の、標高30~40mほどの場所に位置し、眼前の海のかなたに天草の島々や野母半島などが望まれる。

2 歴史的環境

町の南東部にある愛宕山の南東麓に口之津三軒屋貝塚が位置し、南麓には永瀬貝塚が知られている。三軒屋貝塚は、弥生時代中期から後期にかけての貝塚で、U字溝が確認されている。土器のなかには製塙用と考えられる支脚つきのものもある。礫石器や骨角器も出土している。台付き甕に見られるように、九州中部の影響も窺える。永瀬貝塚は縄文時代から弥生時代中期から後期の貝塚で、貝殻はハマグリが多く、岩礁性のサザエ・カキ・アワビなどは少ない。磨製石斧も出土している。このほか、町内には内野貝塚・千壇貝塚が知られている。2の千壇貝塚は弥生時代を中心とする貝塚で、3の内野貝塚は縄文時代から弥生時代にかけての貝塚である。

中世の遺跡としては水月名に、大智禅師が正平13(1358)年に開山したと伝えられる4の円通寺跡がある。5はコレジオ跡で、町内には県指定の文化財として二群のキリストン墓地がある。野田名字砂原と水月名字須崎にそれぞれ2基と3基である。6は小松寺星敷跡とされている。

橋湾（千々石湾）沿岸には、海による生計を主にしていた人々の残したものと考えられる遺跡がかなり知られている（第1図）。2の有喜貝塚は橋湾の最も奥まった場所にある貝塚で、過去の調査で豊富な遺物が出土している。標高10mほどの丘陵先端部に立地していて、縄文時代中期から後期にかけての土器や石器のほかに各種の骨角器などが出土している。3の大門貝塚も古くから知られていて、上器や石器、各種の骨角器などが出土している。弥生時代も生活の場として使用され、古墳時代まで及んでいる。人骨も出土し、埋葬の場所としても使われていたことが窺われる。4の脇岬遺跡は野母半島の先端部にある縄文時代前期からの遺跡で、弥生土器や青磁なども出土することから、かなりの時代の幅が考えられている。このほかにも、菖蒲川遺跡・為石遺跡・千々遺跡・片町遺跡・太田尾遺跡・下笠貝塚・築崎遺跡・国崎遺跡など多くの遺跡が知られている。

早崎瀬戸を挟んだ対岸の五和町二江には沖ノ原貝塚がある。小さな岬が通詞島に向いて伸び、その東岸に位置し、縄文時代前期から弥生時代・古墳時代にかけての遺物が出土している。上器は曾畠式土器・後期の西原式土器・御領式土器や弥生土器、土師器・須恵器・近世土器などと報告されている。石器には磨製石斧・石鎌・石匙・尖頭器などや黒曜石の鋸齒状石器、そのほか石臼・石皿が出土している。それと、辻貝塚でも出土する三日月形の砾石器の出土も報告されている。



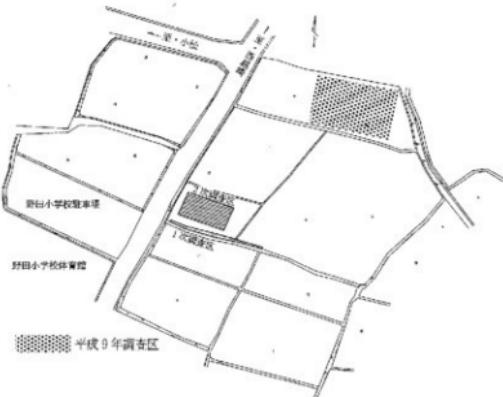
1 辻貝塚 2 千壇貝塚 3 内野貝塚
4 円通寺跡 5 コレジオ跡 6 小松寺屋敷跡

第2図 辻貝塚周辺の地形と遺跡

III 調査

1 平成2年度 調査の概要

調査は平成2年6月に、第1次調査と第2次調査にわけて行われた（第3図）。第1次の調査は、長さ25m、幅1.5mの水田の縁の部分である。調査では多くの土器が出土し、砾石器や磨石なども出土している。V字溝や柱穴なども認められ、弥生時代後期の集落があった可能性も考えられている。第2次の調査は幼稚園のプールの部分で、幅約1mほどの溝が確認されている。第1次調査の際に確認された溝とつながるものとすれば、一辺18mほどの範囲に方形に溝がめぐることを予想されている。平成9年の調査地点は、平成2年の調査区から北東に30mほどの場所である。



第3図 平成2年・平成9年調査区域図



第4図 調査区の設定図

平成8年度の調査

平成2年度の調査地点に近く、遺跡として周知されていたため範囲確認調査を実施することとなつた。建物の建つ場所は東側で、西側の部分は簡易舗装の駐車場となるとのことで、建物部分に2m×2mの試掘場を5箇所、西端に1箇所の試掘場を設定した。この調査の結果、遺物包含層が残っており、その層は北側にはほとんど無く、南側に顯著であることが確認された。また出土する土器片が小さいため、他の出土地から移されたものか、などの疑問も生じた。南西端の試掘場からは柱穴状の溝もみられた。以上の調査結果から、平成9年度に本調査を実施することを確認し、調査を終えた。

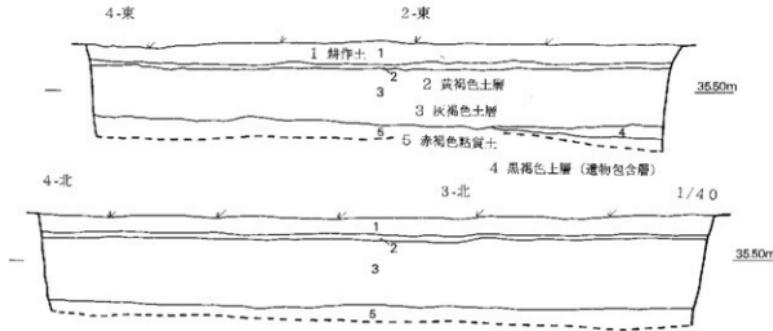
平成9年度の調査

5月6日 文化課分室に用意した調査器材をトラックに積み込み、加津佐町に向かう。町教育委員会に挨拶のあと現地に器材を運ぶ。午後、調査区域を設定し4区割りにし、10m×6mに区切りそれぞれの間に1mの幅のあぜを残して掘り下げた。南東部がII-1・南西部はII-2・北東部II-3・北西部II-4とし、順次表上から人力で掘り下げにかかった。

7日は3区4区とも、それらの東壁から約3mほどを残して掘り下げた。8日は雨風ともにひどく、現場はプールのように水がたまり、作業は中止した。この後も掘り下げを続け、土層の状況・遺物出土状況・調査風景・遠景などの写真撮影も平行して行った。各あぜに35.5mの標高を移し、土層の実測を行い、その後あぜをはずして遺物の出土状態を記録した。各区域ごとに分けて遺物を取り上げ、小さな柱穴状の穴を位置と形、深さなど平板測量を行った。これらの作業が終わった場所から埋め戻しにかかった。5月28日の午前中は埋め戻しと器材の水洗、器材小屋の掃除。町の松藤教育長の作業員さんへの挨拶などのあと、器材・遺物などと長崎への帰路についた。

2 土層

土層は大きく5層に分けられる。表土は耕作土で、耕されて乾燥したときは微細な粉末状になり風が強いと舞い上がる。第2層としたものは黄褐色土層でかなり固く、水田の水を逃がさないように、明らかに客土したものと思われる。第3層は灰色味のまじる褐色土層で、この層はさほど固くない。第4層は黒褐色土層で遺物包含層であるが、この層も固くはない。3区と4区の北側にはこの層がな



第5図 土層実測図

辻貝塚

く、したがって遺物の出土も少ない。この層が徐々に厚みを増しつつ南側に続き、平成2年度の調査地区に及んでいるものと考えられる。この下層が第5層とした、赤褐色の粘質土となっている。

この層を切り込んで柱穴状の穴があるが、形が小さく規則性も認められない。この層は粘質の度合いが強く、水を通しにくい。強い雨の後、ブルー状に水が漏るのもこのためであろう。

3 遺物出土状況

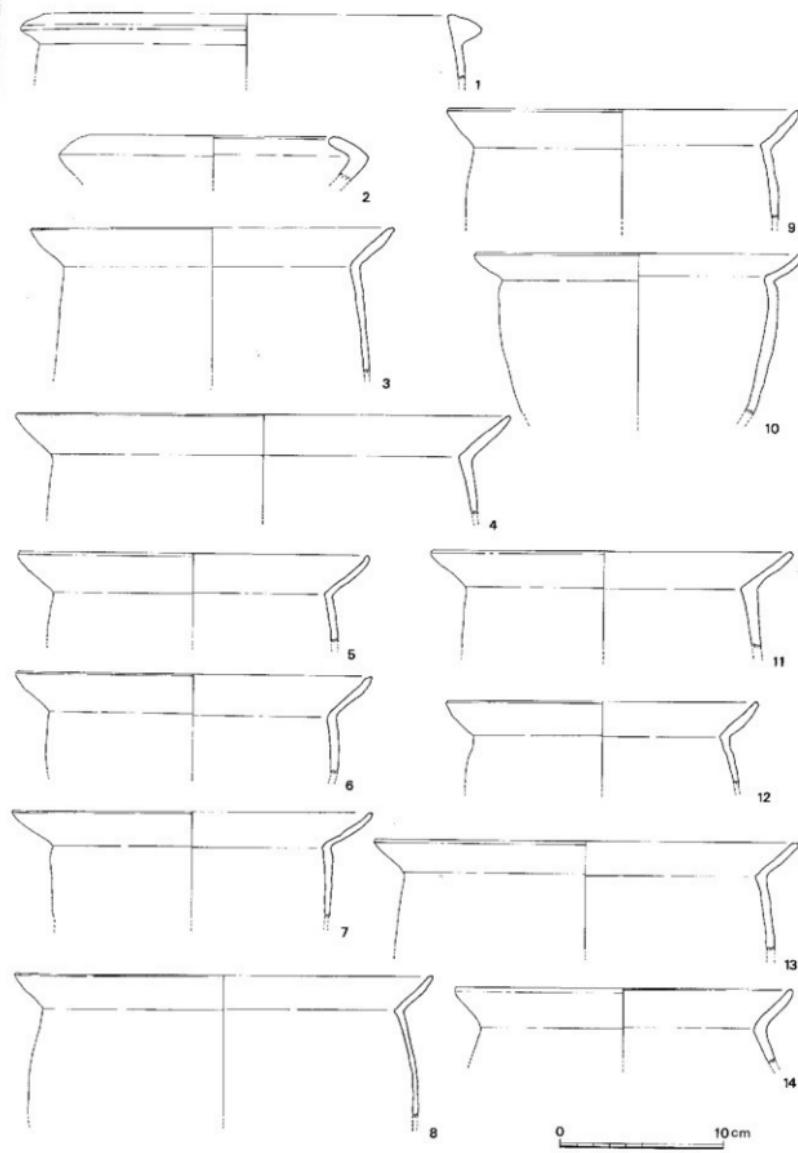
遺物は北側には少なく、2区の北東部からの出土が多かった。残しておいたあぜが十文字に交わる付近を中心にして散布しているが、原形を留めたものは少なかった。平成8年の範囲確認調査の時点でも感じたが、どこか他の地点から運ばれてきたものか、水田になる前の段階で周辺から寄せられ埋められたものであろうか。単なる、いわゆる土器溜めとは異なるようである。これらの土器片に混じって、礫石器や石錐などが出土している。平成2年度の調査でも出土していて、海や川での使用が考えられている。穂摘み用の石器などの出土は認められなかった。

4 遺物

・土器

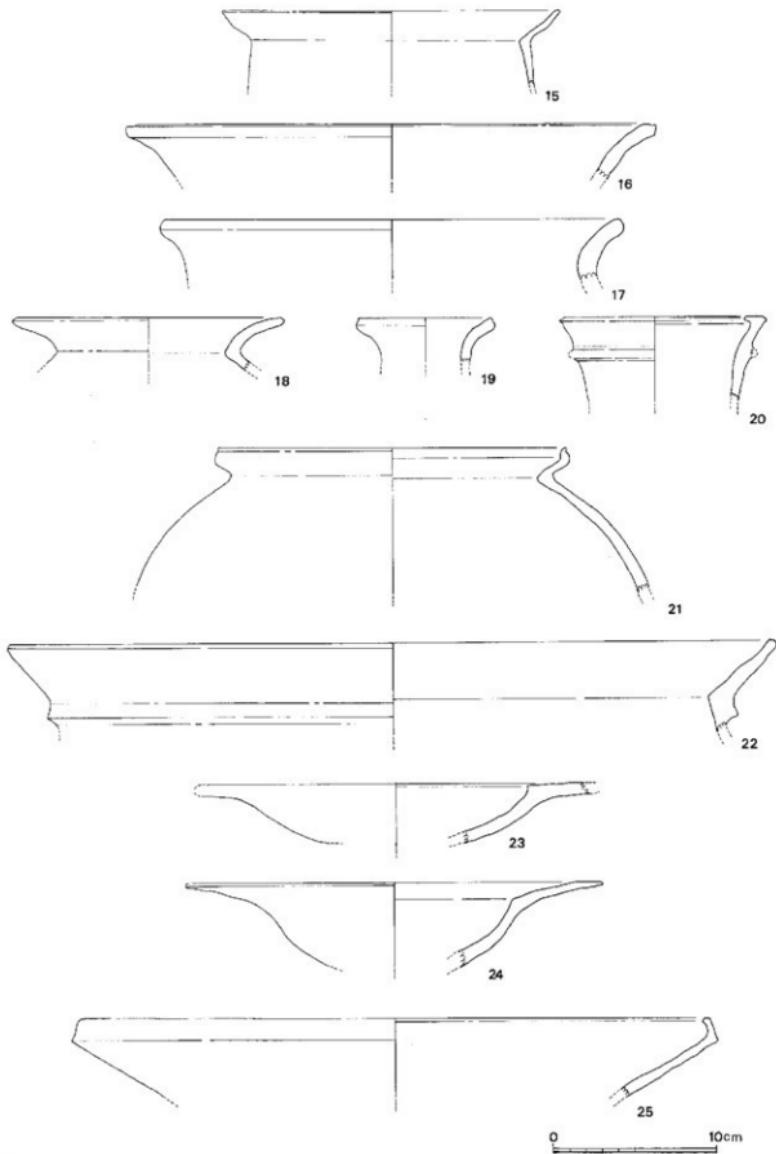
土器には甕・壺・高杯・器台などがある。

1は断面が三角形をした甕の口縁部。かなり胴が張る形になるものと思われるが、器壁は薄い。淡い茶褐色で胎土はやや荒い。2は壺の口縁部で、淡い茶褐色を呈し胎土はやや荒い。3・4は甕の口縁部でわずかに内彎しつつ伸びる。器壁は薄く暗茶褐色を呈する。5~15はいずれもわずかに内彎する口縁部をもつ菱形土器である。いずれも器壁は薄く、口縁先端部は丸くおさめている。5・6は淡い茶褐色、7・8・9は赤味がかった茶褐色をしている。10は口縁部が短く、暗茶褐色をしている。11は明るい茶褐色で、内面頸部には稜線が付き、ナデて仕上げのような痕跡が認められる。胎土は良好で丁寧な作り方がうかがえる。12・13は赤味がかった茶褐色を呈し、胎土はやや荒い。14は淡茶褐色。15も内面頸部に明瞭な稜が付く。内面は淡茶褐色、外面は赤褐色を呈する。16も甕の口縁部で、先端部をやや尖らせ気味におさめ、外方を平らにおさめている。淡い茶褐色で作りは丁寧。17は厚手の口縁部で、先端部分は丸くおさめている。淡い茶褐色。18は外反しつつ伸びる短い口縁部で、先端部はやや薄く丸くおさめている。内外面にナデて仕上げた痕跡が認められる。濃い茶褐色を呈する。19は小形壺の口縁部で、外面はやや平らにおさめている。一部に赤色の顔料が残っている。胎土は良好で水濡したもののように観察される。他の土器に比べ特別な使用方法がうかがえる。20は口縁に近い部分と思われるが、全体の形状は不明。稜を付けて折り込み、さほど長くない口縁先端部になるものようである。その下に突帯を付けているが、全体に巡るものではなく、製作時に切られナデて仕上げたものを焼いている。淡い灰褐色で胎土も良い。器壁の断面は黒褐色を呈する。21は丸みの強い胴体に短い口縁部をもち、先端部を内側に折っている。赤味がかった茶褐色で、胎土はやや荒い。22はやや内彎する甕の口縁部で、先端部は丸くおさめている。頸部に突帯をもち、淡い茶褐色をしている。23・24は高杯の胴から口縁の部分である。内彎して伸びた胴を、内側に稜が付くほど折り返している。いずれも淡い赤褐色。25は高杯の胴と口縁部。直線的に伸びた胴体に直角に近く折り付けた形である。



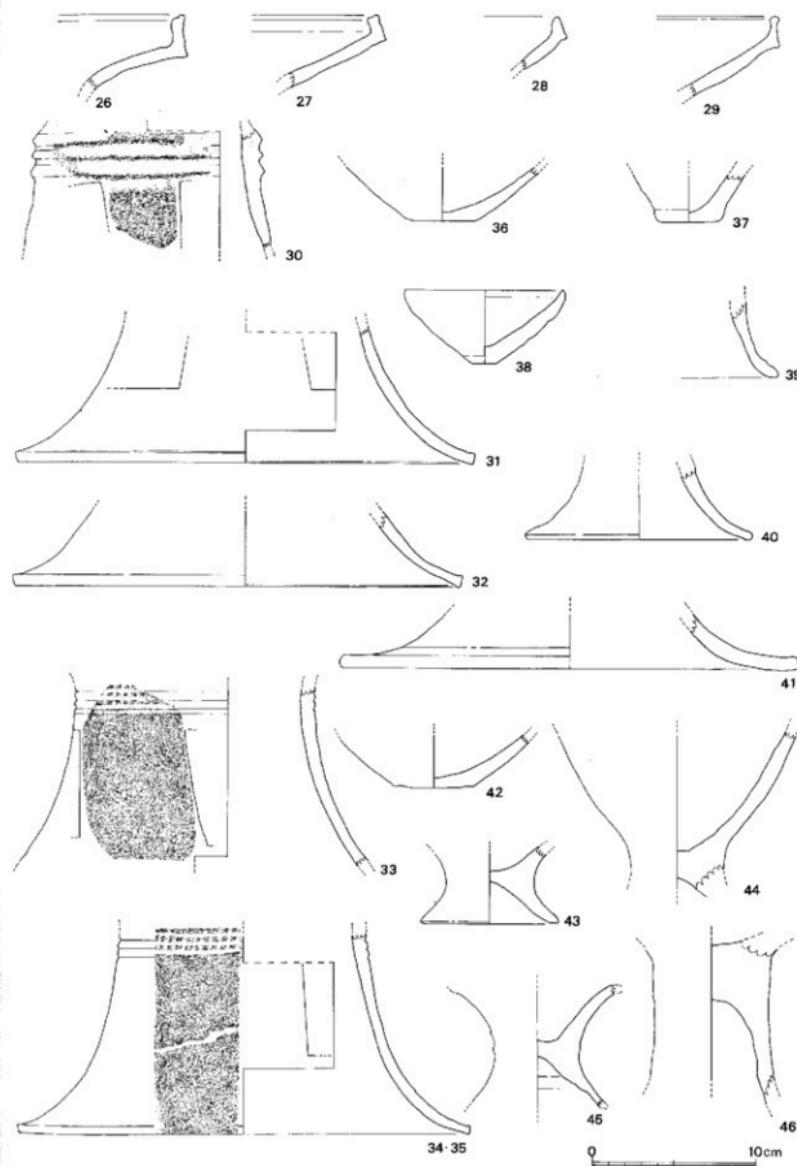
第6図 遺物実測図（土器・1）

辻貝塚



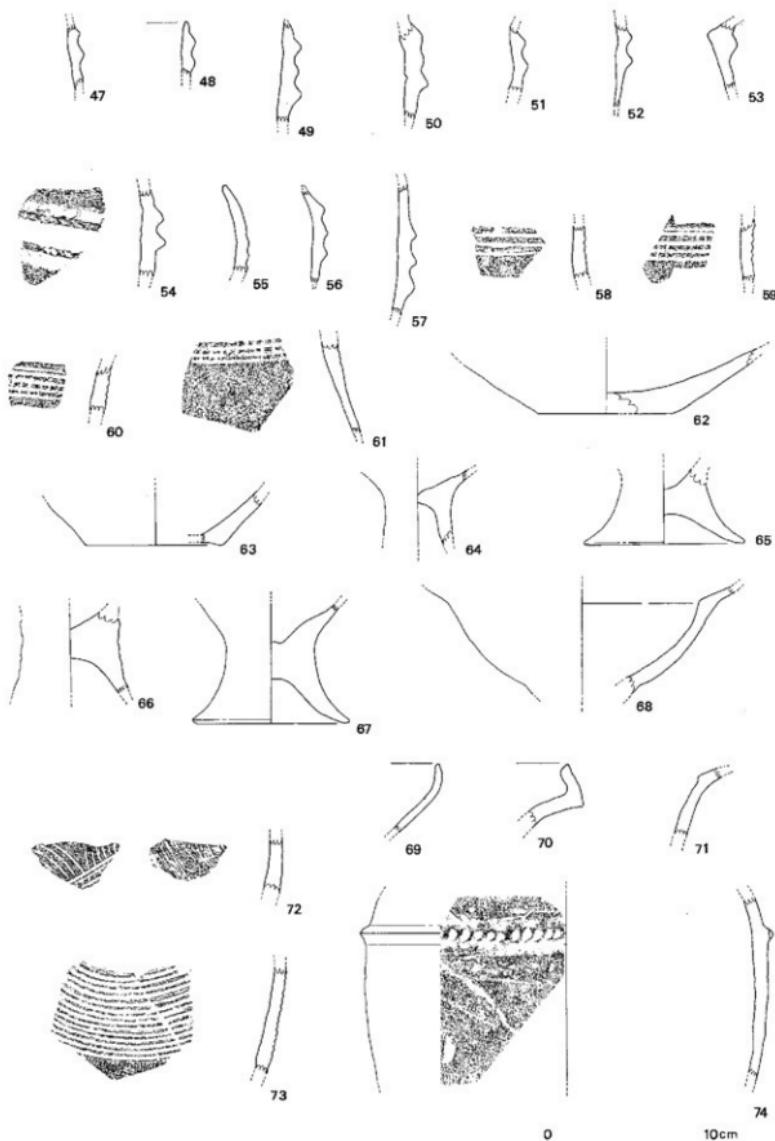
第7図 遺物実測図（土器・2）

辻其塚



第8図 遺物実測図(土器・3)

辻貝塚



第9図 遺物実測図（土器・4）

全体的に茶褐色。26は壺の口縁部で、外反する頸部をほぼ直角に折った形のものである。折り返したところに刻み目のある部分もある。赤味がかった茶褐色を呈する。27は高杯の口縁部を折り、先端部分を平らにおさめている。赤味がかった茶褐色を呈する。28・29は淡茶色褐色、30~35は方形の透かしをもつ大形の器台で、赤味がかった茶褐色をしている。36・38は小形の鉢で、淡い茶褐色。37は壺の底部と思われる濃い茶褐色を呈し、胎土に砂粒を目立つほど入れている。39~41は壺の脚台部分であろう。42は丸底に近い底部で、淡い茶褐色。内面にヘラ様のものでナデた痕跡がある。43~45は脚台付き壺の底部である。43・44は茶褐色、45は赤味のある茶褐色を呈する。46は高杯の脚部で、淡茶褐色を呈する。47~57は突巻付き壺の胴体部分で、やや厚手の作りである。48・50は濃い茶褐色、他は茶褐色を呈する。58~61は器表に櫛様のもので文様を施し、赤味がかった茶褐色をしている。59は器壁に切り込みがあり、器台と思われる。62・63は壺の底部と考えられる。64は高杯の脚部で、赤味のある茶褐色を呈し丹塗りの痕跡らしいものも認められる。65~67は壺の脚台部分。68・69は高杯、70は壺の口縁部。71は高杯。72は表面に丹が残る。73は器表に細い櫛様のものでの沈線が巡る。内面の仕上げは荒い。壺の部分と思われる。74は突帯をめぐらし、刻み目を施している。

・石器

礫石器・石錐・石斧・敲石・スクレーパーなどが出土している。

1は三日月形の完成品で、扁平な自然礫を両面から丁寧に打ち欠き形を整えている。長さ9.3cm、中央部の最大幅5.5cm、厚さ2.8cmで、重さは220gある。2は三日月形をした製品であるが、三分の一ほどが折れている。両面から打ち欠いて挟りを入れ形作っている。現存長10.2cm、幅5.4cm、厚さ3.1cm、重さは228gである。3は片面に大きく剝離された面が残り、反対面には自然礫の部分もあるが概ね丁寧に作っている。先端の一部が小さく欠けている。現存長8.6cm、幅4.4cm、厚さ2.8cm、重さは123gである。

4・5ともに磨製石斧であるが、刃部を残し多くを欠失している。蛇紋岩製であるが、風化が著しく若干青味がかった灰色を呈している。

6は石錐で、扁平な丸みをおびた自然礫を利用したもので、中心部をややそれた場所に小さなくぼみを打ち欠いている。安山岩と思われ、重さ309g、長さ13.0cm、幅5.7cm、厚さ2.4cmを計る。

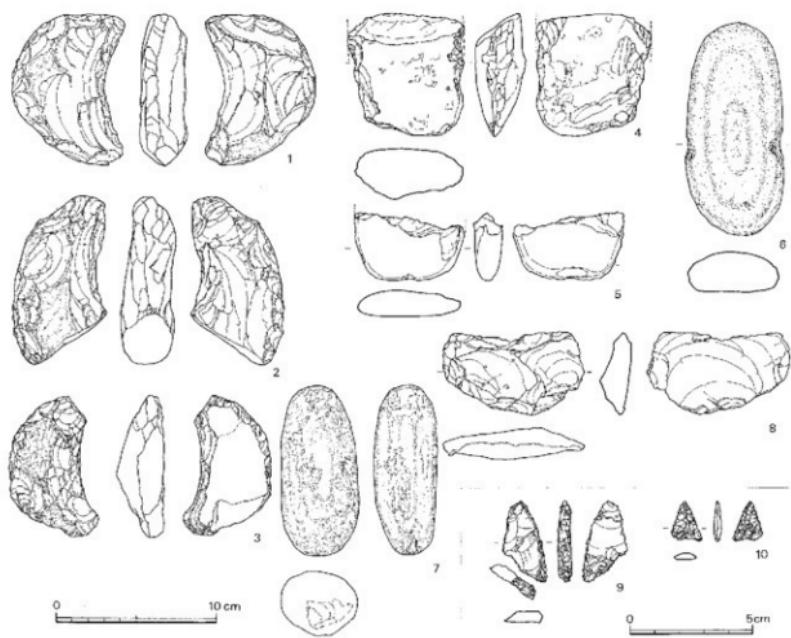
7は敲き石と思われる丸みのある自然礫である。一端に敲きの痕跡が認められる。長さ10.3cm、最大幅4.7cm、厚さ3.9cmある。

8は安山岩の剝片で、スクレーパーと思われる。片面には大きな剝離痕を残し、反対面に加工を施して刃部としている。作りはやや荒いが、スクレーパー的に使用したものと考えられる。

9はナイフ形石器で黒曜石製。先端部などをわずかに欠くが、ほぼ原形を残している。

10は小形の黒曜石製の石鏃である。三角形で基部にわずかに抉りがある。

辻貝塚



第10図 遺物実測図（石器）

IV まとめ

辻貝塚は、弥生時代の後期から終末期にかけての時期の遺跡である。出土する遺物など、隣町の三軒屋貝塚や永瀬貝塚、早崎瀬戸を挟んだ天草下島の沖ノ原貝塚に似たものが認められる。この遺跡は古くから知られており、近くの野田小学校の造成工事や町道開設工事の際にもかなりの遺物が出土したことが伝えられている。弥生時代後期から終末期にかけての、さほどの年数もないように思える期間に、このように多くの遺物を残すだけの人々がいたのか、信じがたい思いもする。また、その人々はどのような生活・生業で生きていたものかについても興味がつる。海や川に関係する遺物として、縄石器や石鍬などが出土しているが、穂摘み具などの農耕に従事していたと思われるような遺物は認められていない。生計の多くを海や川、山の植物などに頼る部分が多かったものと考えられる。いわば、弥生時代の土器は使用しているが、生活の形態は縄文時代と大差がない、狩猟や採集の状況を考えられる。

出土する遺物も、現在の熊本県地方に出土するものに近いものがある。幅およそ5kmの早崎瀬戸を挟んだ天草諸島や宇土半島などと、海を介しての交流が当然考えられる。島原半島は現在でも、東海岸、西海岸ともに陸路での交通が困難な場所が残っている。海を活発に動いていた人々の残した遺跡が、この辻貝塚だと考えられる。

本報告書の最後になるが、調査にあたって加津佐町の関係者の方々、教育委員会の方々のほか、発掘調査に従事して頂いた地元の方々に厚くお礼を申し上げます。また調査員の宿食となつた、せとぐち旅館の瀬戸口康子氏にも非常なお世話になりました。心からお礼を申し上げます。

参考文献

- 坂本経亮・経昌『天草の古代』 1971年
- 林田第壹號『加津佐郷土誌 加津佐史話』加津佐町 改訂増補 1981年
- 長崎県教育委員会『今福遺跡 I』長崎県文化財調査報告書 第68集 1984年
- 長崎県教育委員会『今福遺跡 II』長崎県文化財調査報告書 第77集 1985年
- 加津佐町教育委員会『辻貝塚』加津佐町文化財調査報告書 第1集 1991年

図 版





遺跡遠景・近景

図版 2

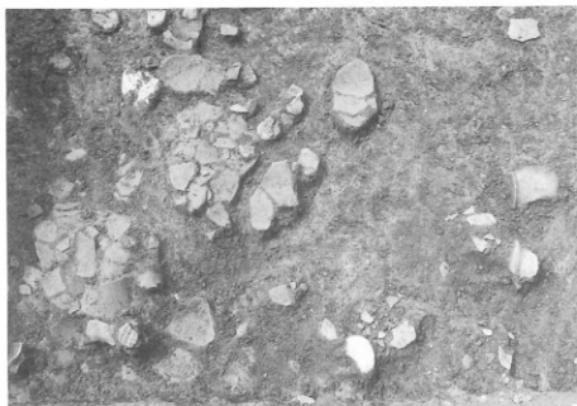


調査風景



土層の状況

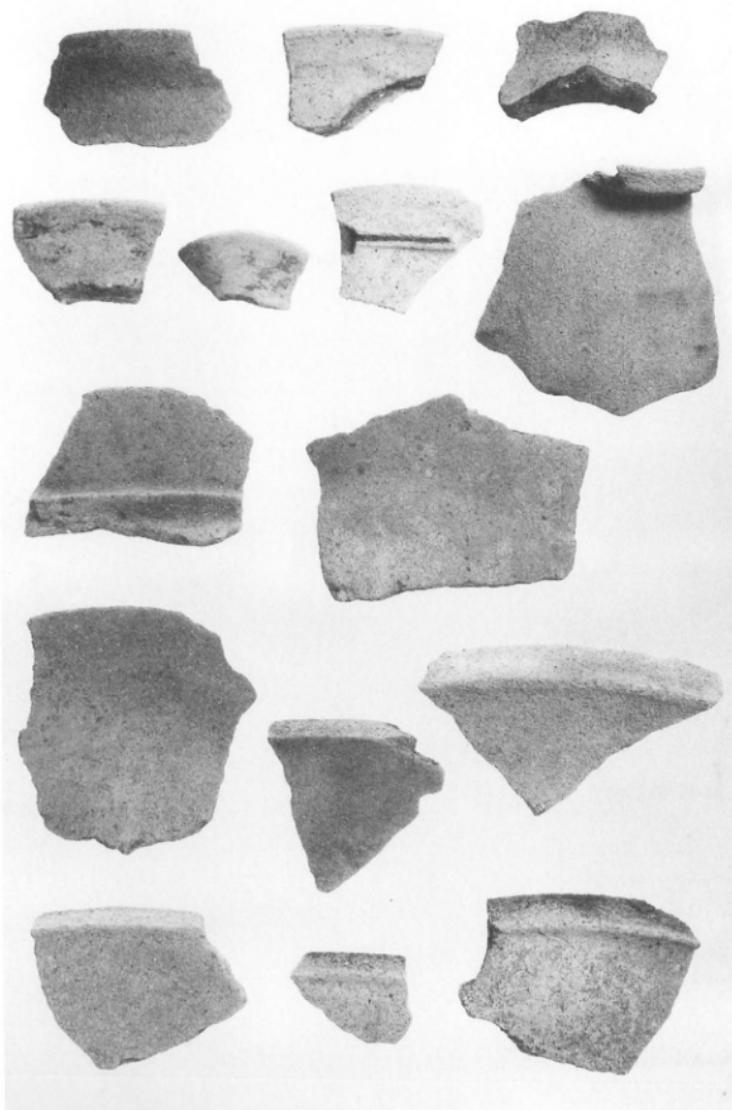
圖版 4



遺物出土狀況



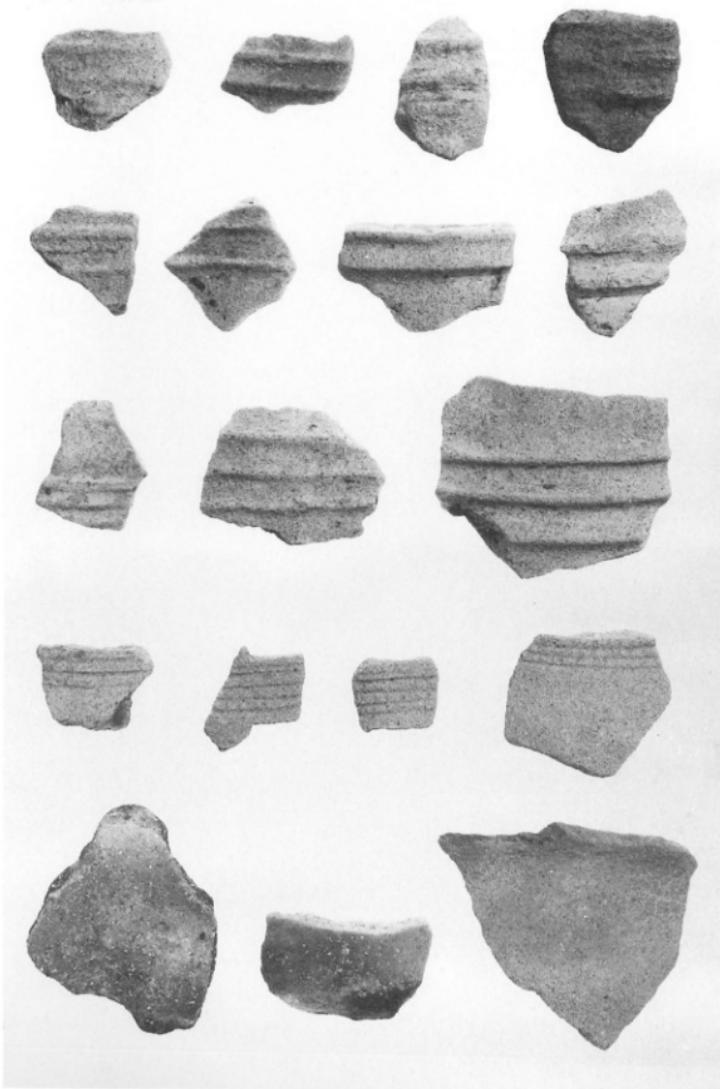
出土遺物（土器）



出土遗物（土器）



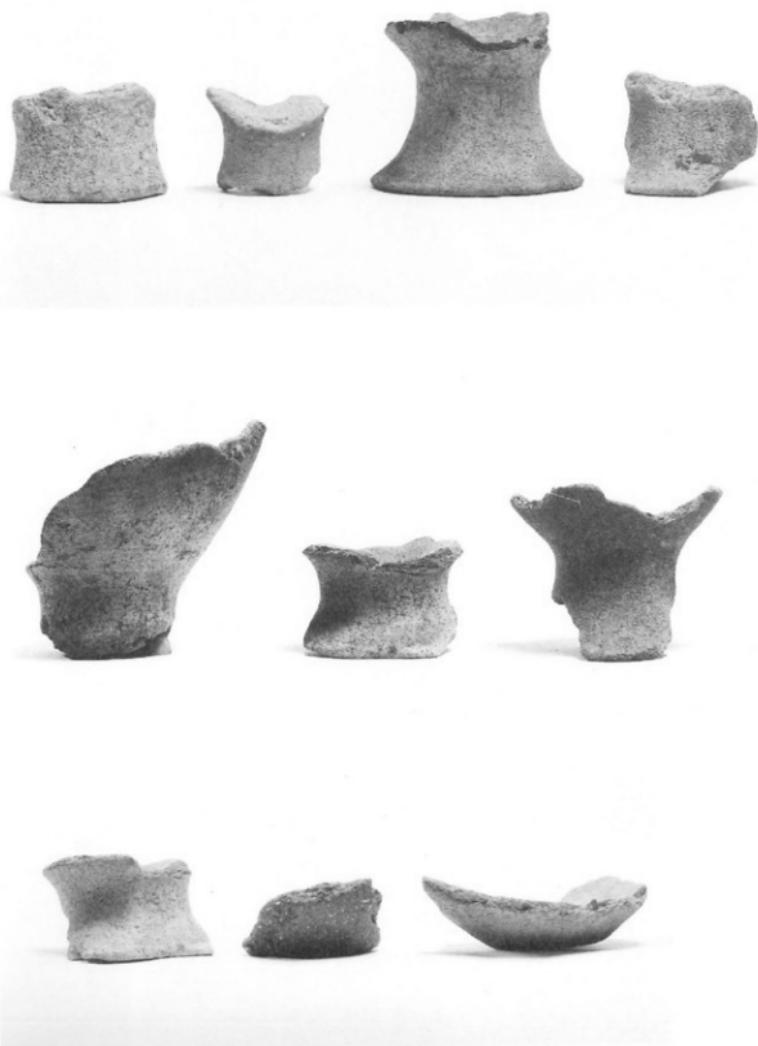
出土遺物（土器）



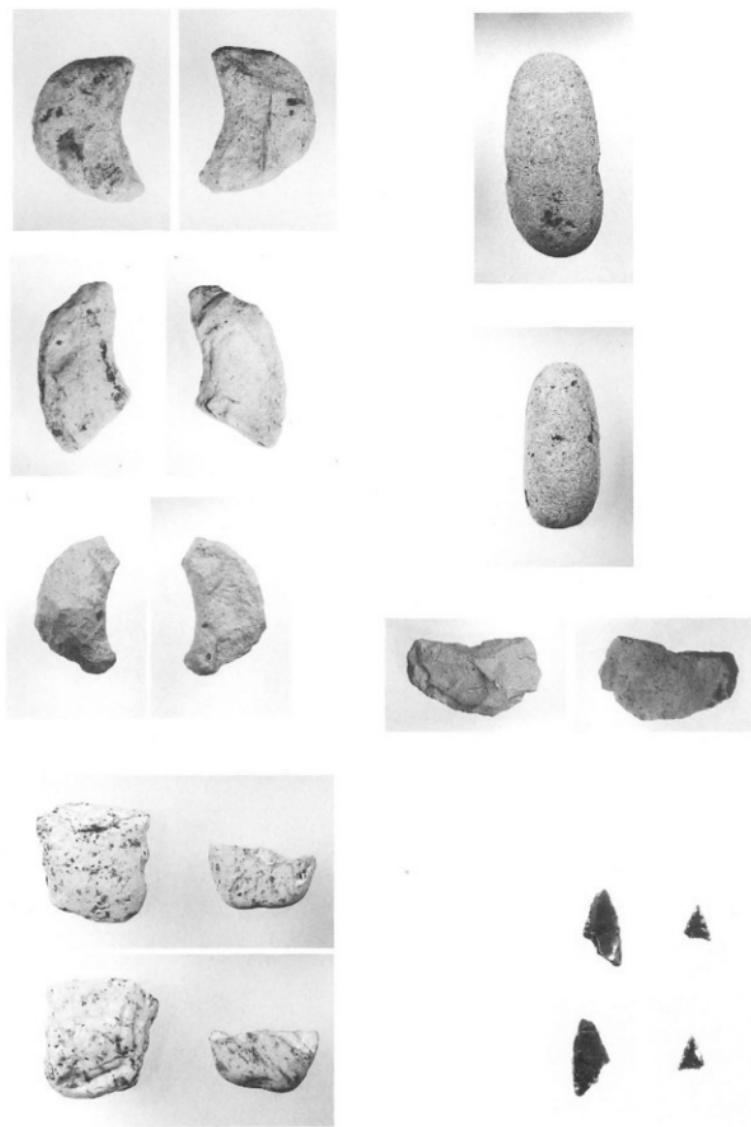
出土遺物（土器）



出土遺物（土器）



出土遺物（土器）



出土遺物（石器）

報告書抄録

ふりがな	つじかいづか						
書名	辻貝塚						
副書名							
卷次							
シリーズ名	加津佐町文化財調査報告書						
シリーズ番号	第2集						
編著者名	藤田 和裕						
編集機関	加津佐町教育委員会						
所在地	〒859-2601 長崎県南高来郡加津佐町己2792番地2 TEL(0957) 87-3262						
発行年月日	西暦1998年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経 ***	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
辻貝塚	長崎県 南高来郡 加津佐町 野田名辻田	42369	10	32° 38° 01°	130° 9' 30"	19970506 ~ 19970528	240 m ² 福祉施設建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
辻貝塚	散布地	弥生時代		・弥生時代後期から終末期の土器 ・礫石器			

加津佐町文化財調査報告書第2集

辻貝塚

1998年6月発行

発行所 加津佐町教育委員会
長崎県南高来郡加津佐町己2792番地2
〒859-2601 TEL (0957) 87-3262

印刷所 (有)三省堂印刷所
長崎市幸町4-28
TEL (095) 825-6171